1960年代の「名もなき人々」の文化実践を考えるために
――中津川労音に持たれたイメージを手がかりとして――

東谷護　愛知県立芸術大学音楽学部教授（音楽学）

はじめに

ポピュラー音楽に付されたイメージの一つにマス・メディアとの親和性が高いことがあげられる。これはレコード、CD、テレビやラジオによってポピュラー音楽を知ることに起因する。しかしながら、こうしたポピュラー音楽のイメージと相容れない、すなわちマス・メディアとは無関係に多くの人に知れわたらせた媒体として、1950年代半ばより1960年代半ばにかけて急速に会員数を増やしていった音楽鑑賞団体の勤労者音楽協議会、通称、労音の存在がある。

本稿では、労働組合や左派との結びつきが強かった労音が、ポピュラー音楽の広がりを支え、「名もなき人々」が集まる場であった側面に着目し、事例対象として岐阜県の中津川労音を取り上げ、労音にもたれていたイメージと実際の会員の持つ思想との関連性についてインタビューを含む実証的研究によって考察したい。

中津川労音は、戦後、労音運動が盛んになっていくなかで、結成された。興味深いことは、中津川労音の取り組みが、全国労音の一支部としてとらえるよりも、地域独自の動きがあった点にある。独自の活動として、日本のフォークソング、とりわけ関西フォークの黎明期の支援、日本の野外コンサート（オールナイト形式）の黎明期のものである、全日本フォークジャンボリー（1969年～1971年）の開催や、入場税撤廃に関わる裁判、などがあげられる。

以下、労音について概観し（1）、続けて事例対象の中津川労音の設立経緯とその当時の全国労音の状況を確認する（2）。さらに、中津川労音の元会員へのインタビューを含む一次資料の精査を通して、中津川労音がどの程度、左派というイメージをもたれていたか、「名もなき人々」が集まる場であったかを検証する（3）。これらを踏まえて、中津川労音の有する文化史的意義について明らかにしたい。なお、本稿で扱う一次資料の中津川労音の機関誌「中津川労音」は会員にしか配布されなかったものであったが、東谷護（編著）『復刻　資料

「中津川労音」―1960 年代における地域の文化実践の足跡を辿る―』（風媒社、2021 年）として公刊されているので、一般にも入手しやすい復刻本を底本とする。

1. 労音とは何か

労音とは、音楽鑑賞団体であり、勤労者音楽協議会の略称である[1]。1949 年 11 月に、労働運動団体、関西自立楽団協議会、朝日会館の活動が設立基盤となり関西勤労者音楽協議会（以後、関西労音）が大阪で約 500 人の会員数で設立された。翌年の 1950 年 8 月に京都労音と神戸労音が設立されたため、関西労音は大阪労音と改称された。大阪労音の会員数はほぼ 5 年後の 1954 年 7 月には約 48,000 人に増えた。この数字に京都労音と神戸労音の会員数を足すと約 67,000 人であった（高岡 2011:321-324、東京労音運動史編さん委員会（編）1994:48、東京労音運動史編さん委員会（編）2004:16-18）。さらに、西宮、和歌山でも設立された（東京労音運動史編さん委員会（編）2004:341）。こうした関西での動きに呼応して、1953 年 10 月に東京労音が、同年 12 月に横浜労音が設立された。いずれの労音も、設立基盤となる団体があり、それらの団体は関西労音の活動に影響を受けた。こうした動きが全国へ拡がるにつれ、1955 年には全国で会員数は 13 万人に達した。各地の労音を連携させるために、1955 年 9 月に第 1 回全国労音連絡会議が滋賀県大津で開催され、以下のスローガンが決定された（東京労音運動史編さん委員会（編）2004:31-32）。

① 良い音楽を安く多くの人に
② 企画運営は会員の手で
③ 国民音楽の創造・育成
④ 全国の労音が力を合わせよう

労音を理解する際に、正式名称にある「勤労者」と、スローガンにある「安く」という鍵語が補助線となる。東京労音のウエブサイトには「労音の特徴は、会員（聴き手）が中心となって企画・運営を行う」ことだとし、戦後日本の音楽文化史のなかに果たした功績として「戦後間もない発足の頃、それまでは高

嶺の花であった音楽会を、勤労者を中心とした一般市民のものにしてきた」と記されている[2]。ここでいう「高嶺の花」とは西洋の芸術音楽、いわゆるクラシックのことであるが、こうした音楽会やコンサートといったイベントを楽しむための興行を原則として企画から運営まで自分たちの手によって行ったのである。経済的な問題については、イベントごとにチケット代を売って興行収入を得るのではなく、会員からあらかじめ会費を徴収することによって予算を安定化し、イベントごとの会員の支出負担をなくすことと、興行による赤字を防ぐことが出来た。見方を変えると、会員数が多ければ多いほど予算が安定することになる。主たる会員を勤労者に定めたこともあって、職場のサークル活動の一環として労音への会員加入を勧誘した面もあった[3]。

同じく重要な鍵語として「良い音楽」があるが、スローガンだけではどのような価値基準によるものかがわからない。ここでは、それを探る手がかりとして、東京労音創立 50 周年を記念して刊行された『東京労音運動史 1953 ～ 2000 年』の記述を見てみたい。

> 「良い音楽」の要求や好みは多様であって、主観的に決めつけることはできません。大切なことは、会員相互の批評活動の積み重ねなど、鑑賞力を高め、多面的・組織的に追求していくことと考えます。そこで労音は、運動の当初から、会員アンケート、合評会、音楽家との座談会、企画部会、運営機関等での検討によって、「良い音楽」を不断に追求し、推進してきました（東京労音運動史編さん委員会（編）2004:1）。

合評会というのは、労音が主催した例会終了後に例会に参加した会員が自由に感想や意見を述べることで、次回の例会企画に役立てようとするものである。なお、例会とは名称が違うだけで、実質的には音楽会やコンサートなどのイベントのことである。当初、クラシック音楽を中心に例会を企画運営していたが、会員数の増加、労音設立が全国へ拡大するとともに、扱う音楽ジャンルも多岐にわたるようになった。

2. 中津川労音発足と全国労音の状況

先ず、研究対象とする中津川労音のあった岐阜県中津川市について概観する。

岐阜県は、県庁所在地がある岐阜市周辺を岐阜地区、その西側を西濃地区、東側を中濃地区、山間部を飛騨地区、県内で最も東側を東濃地区と大きく五つの地区にわけられている。

岐阜県は地理的には愛知県と隣り合わせであるため、愛知県の県庁所在地である名古屋の通勤圏となっている市町村もあるが、これは 1970 年以降にみられた現象であって、それ以前は必ずしも名古屋の通勤圏ではなかった。岐阜県中津川市は、岐阜県では東濃と呼ばれる地域である。東濃とは、岐阜県南東部に対する呼称であり、そこには中津川市、恵那市、瑞浪市、土岐市、多治見市が入っている。東濃地区は、西部と東部に分けられ、西部には多治見市、土岐市、瑞浪市が含まれており、東部は恵那市、中津川市が含まれている。東濃とは、東濃東部のことであり、この地区は東美濃とも呼ばれる。

東濃地区は名古屋を始発とする中央本線沿いに各市が存在することもあって、1968 年の中央線電化による通勤時間の短縮など交通条件が良好になると、名古屋から 40 キロ圏内の多治見市は名古屋の通勤圏に包摂された。中津川は歴史的には、中山道六十九次の宿場町の一つであった（岐阜県 2003:532-540）。

中津川労音は、中津川市立西小学校教諭（結成当時）の近藤武典（1923-1976）を中心に 1963 年 4 月の準備会を経て同年同月に結成された中津川勤労者芸術協議会（以後、中津川労芸）を基盤としている。中津川労芸の活動によってみえてきたことは、演劇、音楽、映画の例会開催をするなかで、音楽を扱った例会の回数と参加者数が多かったことである。そこで、学習教材代理店で教材を販売していた笠木透（1937-2014）、濃飛バス（濃飛乗合自動車株式会社）の運転手をしており、労働組合の活動に熱心だった安保洋勝（1938-）、そして恵那信用金庫の坂下支店に勤めていた松井隆康（1937-）の尽力によって音楽一本に絞った労音に力をいれることにし、1963 年 10 月に中津川労芸は中津川労音へ発展解消をした。全国労音としては 141 番目に結成された（東京労音運動史編さん委員会（編）2004:342、近藤 1977:307-314）[4]。なお、近藤武典は中津川労芸結成時には事務局長、中津川労音発足時には運営委員長を務めた。

中津川労音が解散した正確な日付は残っていないが、機関誌「中津川労音」

の最終発行は 50 号（10.26）（東谷 2021:299）で、50 号が発行された 1970 年 12 月までは例会を開催するなど労音の活動はなされていた。1965 年頃から中津川労音の事務局長だった笠木透によれば、翌 1971 年には中津川労音は休会状態であり、中津川労音の主要メンバーを中心に第 3 回全日本フォークジャンボリー実行委員会を組織し、フォークジャンボリー開催に力を注いだという [5]。中津川労音は 1970 年で実質的には解散したことになる。

中津川労音が結成された 1963 年には、全国労音の会員数は 59 万人だった。前々年の 1961 年の会員数は 45 万人、前年の 1962 年の会員数は 50 万人と労音の会員数が顕著に増加している時であり、そのピークだった会員数 64 万人となる 1965 年の直前に中津川労音は結成された。その後をみると、1966 年 52 万人、1967 年 41 万人、1968 年 34 万人と会員数は激減していく（東京労音運動史編さん委員会（編）1994:66）。

労音の活動を支える会員数の変動は全国労音にとって大きな問題であり、会員数増加のための戦略や会員数激減の問題への対応などに、結成まもない中津川労音も呑み込まれていく。同時期の中津川労音の会員数は、先述した中津川労芸が発足した 1963 年 4 月で 350 人だった。さらに同年 10 月の芦野宏リサイタルを機に会員数を増やし、1965 年 7 月 30 日に開催された第 2 回中津川労音総会時には目標にしていた会員数 1,000 人を越えた（東谷 2021:137）。だが、翌年の 1966 年 9 月 28 日に開催された第 3 回中津川労音総会時には会員数は 700 人に減少した（近藤 1977:394-399）。例会という名だが、実質的な興行を企画運営する上で安定した財源確保の面から一定の会員数は必要であった。その一定数を中津川労音は 1,000 人としていたようである。それは機関誌の「一千名会員によってすばらしい例会を」という小見出しからわかる（東谷 2021:103）。

中津川労音が企画した例会は、ほぼ 2 ヶ月に 1 回、年 6 回程度開催された。内容はクラシック、ポピュラー音楽、民俗芸能、映画上映とジャンル的に偏りはなかった。ちなみに、1965 年に全国の労音で開催された 4,625 の例会のジャンル内訳について、歴史学者の高岡裕之がまとめたものによれば、クラシック 1,318（全体の 28%、以後％のみ明示）、軽音楽 2,893（63%）、伝統芸能 355（8%）、歌舞団（海外）63（1%）である。さらに東海地方に限定すると、511 の例会の

うち、クラシック 149（29%）、軽音楽 328（64%）、伝統芸能 31（6%）、歌舞団（海外）3（1%）であった（高岡 2011:350）。

1965 年当時の会員数が 15 万人だった東京労音と違って、中津川労音は先述したように会員数の目標が 1000 人であって、実際には 700 人前後の会員数で推移したことに鑑みると、予算規模を遙かに上回る例会を開催することは現実問題として無理であった。実際、中津川労音の企画制作部は「800 名から 1000 名の会員数で、少なくとも 2 ヶ月分 400 円の会費で取りくめる専門家は、限られていることです。「坂本九」でも「ザ・ピーナッツ」でも（前号の機関誌第一面のとおり）とても中津川労音では手が出ません。」と会員に向けて現状を訴えている（東谷 2021:189）。こうした予算的事情ゆえに、中津川労音の事務所が確定するまでは中津川労芸結成の中心人物であった近藤武典の自宅が事務所代わりになっていた、と中津川労音の事務局長を務めた笠木透が当時の状況を語った。

先述した会員数増加のための戦略や会員数激減の問題への対応として、中津川労音は地域例会の活性化を試みた。中津川労音主催の地域例会は 1966 年から開始された。地域例会とは、通常の例会が中津川駅界隈を会場としたのに対して、通常例会と同じ内容を会員のいる近隣の町や村で行ったのである（東谷 2021:169,178）。なお、地域例会の出演者は、開始当初の 1966 年は長野県伊那市に活動拠点をおく田楽座だけだった [6]。この試みについては 1966 年 11 月 19、20 日に開催された第 12 回全国労音連絡会議の各地労音代表報告にて事務局長の笠木透が報告した。また、交流会では中津川労音会員が自ら結成した「ぜんまい座」が出演した（東谷 2021:187）。

このように、中津川労音は全国労音の目指した労音運動に積極的に加担したが、2 年後の 1968 年には全国労音の在り方や運営の仕方への不満が爆発する。機関誌「中津川労音」紙面に「拝啓　全国労音殿」と題して、3 回にわたって署名記事を掲載している。機関誌「中津川労音」の記事は筆名、イニシャルなどが多く、署名記事は限られていることに鑑みると、全国労音への強い批判であったことを読み取ることが出来る。さらに署名記事を執筆した笠木透、田中鉦三、渡辺梓は中津川労音の主要な運営メンバーだったことも、その後の全国労音の流れとは別に、中津川労音の独自色を強めていく契機だったといえよう

（東谷 2021:249,258,265）。独自色を強めていく最たるものが地域例会でフォークシンガーの高石友也を招聘したことである。なお、1968 年に 3 回開催したチルドレンコンサートは平日の学校行事であり、当該の保育園長や小学校長の理解を得られての開催だった。中津川労音の地域例会の活性化と高石友也を中心としたフォークシンガーの招聘を積極的に行ったことが、全日本フォークジャンボリー開催へ繋がったのである。

3．労音に対する地域での見られ方／イメージ

中津川労音の前身である中津川労芸の一周年を祝う記事が中津川労芸の機関誌の 1 ページ分にわたって、祝辞とそれを寄せた人物名や書籍広告が掲載されている（東谷 2021:60）のだが、これらについて地理学者で労働組合について精通している山田晴通は「当時の中津川労芸が社共両党を糾合した組織として成立しており、共産党系の人々が一定の存在感をもって関与していたことがうかがえる」と言及している（山田 2021:30）。他にも労働組合の色合いが強い例会も開催されている。

濃飛バスに勤めていた安保洋勝と恵那信用金庫に勤めていた松井隆康の両名は、ともに労働組合に加入していたことによって、中津川労芸に加入し、中津川労音に関わっていった。安保や松井のような形が労音会員への入会動機として至極自然な流れだったと思われる。これとは対照的なのが山本正博（1940-）である。山本は家業の印刷屋を継いだため、自営業者であった。山本は中津川労芸時代に会員となっているが、入会経緯について以下のように語った。

> 僕は、それ（入会する）までは、パチンコやったりとか、どっか遊びに行ったりもしとったけど、飲みに行ったことは少ないんだけど、若い頃なんでパチンコぐらいしかやることなく・・・（略）その当時、すぐに入ったわけじゃないんですよ。あくまで商売で（学校に出入りしていて）。
>
> 近藤武典さんから「おい、パチンコばっかやって遊んでおったっていかんし、こういうやつ（労芸）が出来たで、一遍、来い」って言われてね。

山本は中津川市内で印刷屋を営んでいたのだが、小中学校の印刷物を扱うことが多かったため、小学校教諭の近藤武典と知り合うことになったという。誘わ

れるがままに、例会に行ったところ、興味を持ったので会員となった。しかもかなり積極的に関わったことが山本の語りからわかる。

> ぜんまい座というねえ。あの中でも、出演者としてやったし、僕、太鼓なんかも一生懸命覚えて、最後までやったうちのひとりなんやけどねえ。

前述した、中津川労音の会員で結成された「ぜんまい座」の一員となるほど、山本は労音の活動に熱心だったようだ。山本が当時の中津川労音の会員の属性について述懐した。

> 公務員、営林署とかねえ。営林署とか、学校の先生とか、それからねえ、一般の会社の方も、おるにはおったですねえ。組合とか、そういう人が圧倒的に多かった。

同じ自営業者でも、左官業の田中鉦三（1942-）は、音楽に興味があったから中津川労音に入ったにもかかわらず、思いもよらぬことを近所の人に言われて驚いたと口にした。

> 左の人ばっかしだった。日教組、近藤武典なんか完全に共産党の党員だったし。世間はずっとそういう風（労音は左の集まり）にみとったわけ。
> 俺たち赤や白も関係なく音楽、聞きにいったけど、見る目はそうでなかった。近所の人から「鉦ちゃん共産党か？」って言われたことあったよ。そういう人（＝共産党員、左）がいっぱいおったわけ。学校の教員が党員だったもんね。当時、私が労音に入ったとき、労音の幹部は学校の先生ばっかしだった。（略）それと営林署。営林署の組合をやっとった人。電電公社の組合をやっとった人。

田中の語りから、中津川労音の会員の属性と労音にもたれていたイメージが一般的にもたれているものと同じであったことがわかる。また山本が語った、会員の属性と同じであることから、労音が労働組合や左派と結びついていたこ

とがわかる。

このイメージはより強い形になったエピソードとして、安保は当時を懐かしむように言葉を紡いだ。

> 労音に入っていると特別視されるみたいだね。（略）一時期、女の子には「そんなとこ（労音）行ってると、嫁に行けんぞ」という話もあった。その仲間に入ると嫁に行けなくなるぞと。それは両面で、不良という意味と左（という意味）。

この安保の語りについては、中津川労音が主催した 1969 年の第 1 回全日本フォークジャンボリーに高校生で労音の会員ではなく、観客として参加した開催地の坂下町（現在は中津川市坂下）在住の早川和子（1952-）の語りは着目しておきたい。

> 当時、この町じたいが何か新しいものを受け入れる（土壌）というのが薄い・・・社会党と保守的なものとが二分しているような感じだった。町会議員のなかでもわかれていた。全体的にいうと、新しいものを受け入れにくかった。

早川が指摘した 1960 年代の坂下町の有していた雰囲気を視野にいれておくことは重要である。町全体としてみれば保守的と思われるというものの、完全に保守的ではなかったことと、当時は国鉄や営林署勤めの者が一定数、坂下町にいた。もちろん、労働組合も相応に存在したため、労音の活動そのものが排除されることはなかったようだ。だからこそ、1969 年にオールナイト形式の野外コンサートの第 1 回全日本フォークジャンボリーの開催が実現出来たといえよう。

「おわりに」にかえて

本稿では、中津川労音の会員だった安保勝洋、田中鉦三、松井隆康、山本正博の会員外の人たちから労音にどのようなイメージを持たれていたかの語りに

着目した。安保と松井は労働組合に加入し、組合活動をしていたが、田中と山本は自営業で、組合活動とは無縁だった。二人とも、中津川労音の例会の内容に惹かれて会員を続けていた。田中に至っては、政治的思想とは無縁だったにもかかわらず、近所の人から左派と誤解を受けたというエピソードを持つ。

社会思想を専門とする酒井隆史が自身の父親を「ランク・アンド・ファイル」の活動家の典型であったと著している。安保、山本、松井、田中たちより酒井の父親は少し年長の 1935 年生まれで、共産党員として活動していた。酒井は父親について次のように述懐している。

> 父親の周囲には、若い闊達な空気があった。いまのわが町からは、とても信じられない。とにかく、九州の地方の小さな町も、若く、熱気があったのだ。（略）ギターを弾き歌うことを趣味としていた音楽好きの父は、労音の活動にもとりわけ熱心で、無名の若いミュージシャンがわたしの町にまわってきたときは、自宅に泊めていた。
>
> わたしは、地方の党の活動家の多くが、誠実であって、世間の眼と格闘しながら、ひとのために動きまわり、権威主義からはほど遠く、やさしく寛容であることの多いかを知っている。わたしの父親自身が、まさに望んで、「ランク・アンド・ファイル」であったようなひとでもあった（酒井 2021:722）。

中津川労音の会員であった安保勝洋、田中鉦三、松井隆康、山本正博は酒井隆史の父親のように共産党員ではなかったが、中津川労音を全国労音の一支部としてとらえるならば、地域例会やオールナイト形式の野外コンサートの黎明期と位置付けられる全日本フォークジャンボリーを開催するなど、ランク・アンド・ファイル、すなわち全国労音の幹部ではなく一会員としては立派な業績を残したのかもしれない。

しかしながら、先述したように全国労音に対して機関誌を通して異議を唱えたことに鑑みれば、全国労音の一支部という位置付けを脱出した中津川独自の音楽文化を創り出したといえる。労音が一般に持たれた左派との結びつきがあるというイメージを超えた、中津川労音に集った「名もなき人々」の文化実践

の系譜を辿ることは稿をあらためたい。

謝辞

インタビュー調査にご協力くださった皆様に記して感謝申し上げます。

インタビューに協力してくださった皆様（敬称略、日時、場所）

安保勝洋（2021 年 8 月 18 日、12 月 13 日、2022 年 1 月 24 日、3 月 7 日、於フォークジャンボリー記念館 [中津川市坂下]）

笠木透（1992 年 5 月 26 日ほか多数。於笠木透宅 [中津川市駒場]）なお、2008 年以降については注 5 参照。

田中鉦三（2021 年 8 月 18 日、9 月 13 日、10 月 18 日、11 月 15 日、12 月 13 日、於フォークジャンボリー記念館 [中津川市坂下]）

早川和子（2021 年 10 月 18 日、11 月 15 日、12 月 13 日、2022 年 1 月 24 日、3 月 7 日、於フォークジャンボリー記念館 [中津川市坂下]）

松井隆康（2021 年 8 月 18 日、11 月 15 日、12 月 13 日、2022 年 1 月 24 日、3 月 7 日、於フォークジャンボリー記念館 [中津川市坂下]）

山本正博（2010 年 6 月 8 日、於中津川映画祭実行委員会事務所 [中津川市坂下]）

なお、上記すべてのインタビュー録音データは筆者所蔵。

付記

本稿の労音と中津川労音の概説については、東谷（2021）に収録された解説に加筆修正を加えたものである。

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00219 の助成を受けました。

注

[1] 高度成長期における労音運動の特徴について戦後の文化運動を視野に入れながら論じたものに以下がある。高岡裕之「高度成長と文化運動－労音運動の発展と衰退」大門正克・大槻奈巳・岡田知弘（他）編『成長と冷戦への問い（高度成長の時代３）』（大月書店、2011 年）321-324 頁。労音の歴史について二

次文献を中心に整理し、同時代の文化理論を適宜、援用を試みたものに以下がある。長崎励朗『「つながり」の戦後文化誌:労音、そして宝塚、万博』(河出書房新社、2013 年)。労音と共産党をモデルとして書かれたと言われている、山崎豊子『仮装集団』(文藝春秋、1967 年⇒新潮文庫 1975 年)がある。

[2] 東京労音「労音とは」参照(東京労音ウエブサイト http//:www.ro-on.jp/about/)[最終アクセス日:2022 年 3 月 10 日]

[3] 労音の負の側面については以下を参照されたい:思想運動研究所(編)『恐るべき労音　50 万仮装集団の内幕』(全貌社、1967 年)。

[4] 機関誌「中津川労芸」No.5(東谷 2021:54)の「全国労音ニュース」では全国 139 番目とある。

[5] 筆者による、1960 年代半ばより解散まで、中津川労音事務局長をしていた笠木透氏へのインタビューによる。インタビュー日時:2009 年 4 月 17 日(於:岐阜県中津川市笠木氏自宅)。なお、録音データは筆者所蔵。

[6] 田楽座は 1964 年に旗揚げし、現在に至っている。伝統芸能を現代風にアレンジする自称「まつり芸能集団」である。田楽座ウエブサイト(https://www.dengakuza.com)を参照されたい。[最終アクセス日:2022 年 3 月 10 日]

参考文献

岐阜県 2003『岐阜県史:通史編　続・現代』岐阜県.

近藤武典 1977『近藤武典集』近藤愛子発行 [私家版].

酒井隆史 2021「道場親信における経験－『占領と平和』新装版によせて」道場親信『占領と平和:〈戦後〉という経験』新装版:721-736, 青土社.

思想運動研究所(編)1967『恐るべき労音:50 万仮装集団の内幕』全貌社.

高岡裕之 2011「高度成長と文化運動－労音運動の発展と衰退」大門正克・大槻奈巳・岡田知弘(他)編『成長と冷戦への問い(高度成長の時代３)』:319-364, 大月書店.

東京労音運動史編さん委員会(編)1994『東京労音運動史年表　1953 ～ 1992』東京労音.

東京労音運動史編さん委員会(編)2004『東京労音運動史 1953 ～ 2000 年の歴史』東京労音.

東谷護（編著）2021『復刻　資料「中津川労音」－ 1960 年代における地域の文化実践の足跡を辿る－』（風媒社）
中津川市 2012a『中津川市史 下巻 現代編 I』中津川市.
中津川市 2012b『中津川市史 下巻 現代編 II』中津川市.
山田晴通 2021「1960 年代の中津川労音における公演者：地方小規模労音の夢と現実」『パラゴーネ』9:16-33，青山学院大学比較芸術学会.

インターネット

全国労音一覧：http//:www.ro-on.jp/about/list.html
（東京労音）最終アクセス日：2022 年 3 月 11 日.
労音とは：http//:www.ro-on.jp/about/
（東京労音）最終アクセス日：2022 年 3 月 11 日.
田楽座：https://www.dengakuza.com
（田楽座）最終アクセス日：2022 年 3 月 11 日.